

# インド洋津波被災地アチェにおける女性の経済活動と イスラム教

齋藤 千恵\*

## Women's Economic Activities and Islamic Teachings in post-Tsunami Aceh SAITO, Chie

### Abstract

This paper examines interactions between the concept of gender equality and Islamic teachings in post-tsunami Aceh, Indonesia. I especially focus on how Muslim women empowered by a feminist NGO which enabled them to earn their own incomes, explain their economic activities, as well as inactivities, and negotiate with the Acehnese Islamic view of family.

After the 2004 Indian Ocean Tsunami devastated Aceh, many victims, who had lost their properties and means of livelihood, sought to secure their living; economic reconstruction was one of the important objectives in the tsunami affected areas. Many aid organizations entered Aceh in order to reconstruct destroyed Acehnese societies and provided a variety of programs for the security of victims' economic lives. Aid in affected areas was often a synonym for economic development and empowerment. Through the aids, some aid organizations also spread global hegemony or Western order. Among them, an Indonesian feminist NGO, which loaned capital for women's economic activities in rural areas, conveyed powerful political/feminist messages without including discourse with Islam, which was left to the villagers to provide themselves.

キーワード：津波、自然災害、経済、イスラム、フェミニズム、アチェ、インドネシア

### 1. はじめに

2004年インド洋津波は、インドネシアのスマトラ島沖を震源にした地震に引き続いて起こった大災害である。広域にわたってインド洋沿岸地域が被害を受け、インドネシア、スリランカ、タイ、モルディブ、インドといった国々は特に大規模な被害を被っていた。この津波は、史上最大の自然災害のひとつに数えられた上に、アメリカ人観光客がブーケットで撮影した津波の映像がテレビ画面に繰り返し流れ

---

\* 本学准教授、文化人類学 (Suzuka International University, cultural anthropology)

たことから、世界中に注目された災害であった(Olds, Sidaway, and Sparke 2005)。当然、協力や援助も世界中から被災地に訪れた。

インド洋津波被災地のひとつであるスマトラ島北部に位置するアチェ州は、震源地に最も近いため甚大な損害と損失を被った。2005年3月30日現在、アチェ州では、死亡者、行方不明者を合わせると20万人以上の犠牲者を出していた(OCHA n.d.)。また、全壊家屋数は69,932戸であった(BRR 2005)。こうした大災害に対し、インドネシア内外から多数の援助団体がアチェに入った。被災から一年で、その数400余りであった(BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005)。

こうした援助団体は、怪我人や病人の手当てを行うほか、緊急援助として様々な援助物資を配布したり、テントやシェルターに家を失った人々を収容したりした。復興過程では、インフラストラクチャーの再建設、仮設住宅や復興住宅の建設を行う以外に、衛生面の指導や相続などの法律問題を解決するために尽力していた。生業を失った世帯が経済的自立を果たすのを目的としたプログラムも数々あった。こうしたプログラムの中で早くに始められたのは、夫を失った女性が経済的に世帯を支えていくことを目的としたものである。特に、被害が甚大であった海辺の村々ではこうしたプログラムがいくつも被災から一年も経たない段階で行われ、また、経済的自立を果たすための資本も貸与されたり与えられたりした。これに少し遅れて、女性一般に対して、経済的自立を促進するプログラムが始まった。成人男性がいる世帯での女性の経済的自立を勧めるNPOは、男女平等思想も説いていった。

本論では、インド洋津波被災地であるインドネシアのアチェにおいて、フェミニストNGOの援助を通して、イスラム教徒の女性たちがどのように男女平等概念の理解をしていくのか、如何に自身の経済活動を意味づけ、また、イスラム教的な家族観と対話していくのかを論じるものである。また、女性が男性あるいは夫との関係において、どのように自身の優位性を表現するかも示す。

ジェンダーという言葉とともに入ってきた両性の平等という観念は、イスラム法が施行される自治州であるアチェでは、津波被災後の復興過程において広まり始めた比較的新しい概念である。アチェにも、

インドネシアの法は浸透しており、そこに男女平等・同権観を見出すことができる(cf. Bowen 2003)。しかし、それと復興過程で入ってきた男女平等観が異なるのは、ジェンダーという英単語が平等観に西洋的な、あるいは、国際的なルーツを与えるのと、女性の経済活動と男女平等概念がしばしば結び付けられることであろう。そして、アチェにおいて、この概念は、現状では、社会に、特に男性の間に、根を下ろしつつあるとは言い難い。従って、本論では、女性に焦点をあてる。特に、フェミニスト NGO が被災後間もなく入ったため、州都であるバンダ・アチェよりも早くにこの概念が導入されたアチェ・ブサール県の農村の女性たちに注目する。

## 2. 津波被災後のアチェの農村

スブン・アヨン村は、アチェ州の州都、バンダ・アチェに隣接するアチェ・ブサール県にある農村である。この村は、被災後早い時期に、国内のフェミニスト NGO、ソリダリタス・プルンプアン (Solidaritas Perempuan/女性連帯) が復興援助のために活動を始めた農村のうちのひとつである。ソリダリタス・プルンプアンは、津波被災にあったアチェ・ブサール県の村々で経済援助を提供しつつ、ファミニスト・プログラムを実施していった。

州都に近いスブン・アヨン村は、バンダ・アチェと同様、津波により深刻な被害を被り、そのため、経済復興を最重要課題として取り組んでいた。<sup>1)</sup> スブン・アヨン村の辺りは、アチェ・ブサール県のインド洋側からとバンダ・アチェのインド洋側からの津波が丁度ぶつかった地点であった。しかし、スブン・アヨン村は、高台に位置しているため、津波が海からやってくるのが見え、また、山の中腹にはすぐさま避難できたため、荷物を取りに家に帰ったり、村から離れていた人以外に津波による死者はいなかった。但し、津波は村をほぼ完全に破壊した。木造の古いタイプのアチェの家屋以外は、全壊状態となり、また、村人の生活の糧を生み出す田畑は大きな被害を受け、家畜は流された。<sup>2)</sup> こうして多大な被害を受けた村に対し、援助団体やアチェ・ニアス復興局は、緊急救助・援助から経済援助にいたるまで、

さまざまな援助を与えていった。

スブン・アヨン村の主要産業は農業であり、人口の80%ほどが農業に従事してきた。しかし、津波のため、農産物の収穫量は激減することが予想され、事実激減した。水田からは、波が運んだ瓦礫を撤去したものの、砂自体は2メートル近く積もっていると予測され、それを撤去することはできずにいた。被災から2年ほどしたころ、復興局からの助言で農業を再開したが収穫は最悪であった。水田を借りて耕作している者にとっては、借り賃（通常収穫の半分）や苗代、肥料代などを収穫分から引くと赤字になってしまうほどであった。農業に依存しているスブン・アヨン村にとって、こうした事態は大変な痛手であった。結局、村人たちは、農業の傍ら、ほかの職を見つけるしかなかった。多くの男性たちは、村外に働き口を得、女性たちは、畑作や養鶏、ココナッツ・パウダー作り、菓子作りといった家が村の中でできる仕事を行うようになった。未婚、既婚を問わず、ほとんどの女性たちが、雇用のために村外に出るということを選択しなかった。

農業収入の不足を補う経済活動のために、いくつかのNGOが資金を提供した。最も早い時期に行われたのは、ドンペット・ドゥアファ・バンドゥンによる資金提供である。2005年に村人数人からなる複数のグループに資金提供した。この資金提供により、数人の女性が家内工業に成功したが、他はすぐに挫折してしまっている。2007年にはCAREが村の全世帯93世帯それぞれに3回に分けて計7,000,000RP（約US\$700）ずつ提供した。この資金は、菓子作り、養鶏、牧畜、畑作といったそれぞれの世帯が選択した用途に使用されていった。菓子作り、牧畜が比較的成功したと言える一方、養鶏は鳥インフルエンザの流行のため、畑作は収穫時期の問題で作物に高値が付かなかったなどのため、それほど期待された結果は出なかった。そもそもこれらの生業は、菓子作り以外、直ちに大きな利益を産むようなものではなかった。

生業のために援助された資金が他に流用される場合、また、援助された資金で手がけた仕事が特定の期間を経て世帯を維持していく利益を生み出さなかった場合あるいは生み出す可能性がなかった場合、

こうした金銭を伴う援助は成功したとは言い難いだろう。CARE の資金提供は、その後資金の用途を確認するという入念なものであったが、他方、CARE が資金を提供していった時期と一致して、村のほとんどの家庭が、冷蔵庫や大型テレビセットを持つようになっていった。これらの電化製品は、津波以前は村の多くの世帯が所有していなかったもので、2,000,000~3,000,000RP (約 US\$200~300) するものである。時期を同じくして携帯電話も普及していった。

ソリダリタス・プルンプアンの援助方法は、こうした流用を許さない点で他の NGO とは異なっており、スブン・アヨン村では一定の効果を挙げていた。2005 年にこの NGO は村に入り、下位組織を設立、その後、会員となった女性たちの半数にそれぞれ 1,000,000RP (約 US\$100) の資金を貸し付けた。資金不足で借りることができなかった残りの会員たちは、それぞれ菓子作り、養鶏、ココナッツパウダー作り、畑作のグループに分かれ資金を待っていた。この資金は、後に 2 倍となったものの、会員は当初の 53 人から 42 人に減少していった。これは、資金を得たメンバーは、翌月から返済を開始しなければならず、返済が滞りがちな者は、会員権を失うということが原因でもあった。しかし、こうした返済の必要性から、女性たちは、その経済活動に真剣に取り組んでいった。津波から 6 年が経ち、ほとんどの援助団体がアチェを去り、男性たちが農業以外の職を見つけるのが難しくなると、女性たちは以前よりも真剣に経済活動に取り組んでいった。

ソリダリタス・プルンプアンは、資金の貸付けの傍ら、両性の平等に関する教育的プログラムを展開していった。このプログラムの対象は、会員だけでなく全村民であった。しかし、一方で、多くの村民がイスラム教的な家族観を当たり前のものとして見ていた。そして、新たに村に入ってきた男女平等という概念は、この家族観と矛盾するものとして考えられることもあった。

### 3. アチェの家族観—イスラム教とアダット—

アチェでよく耳にするのが、男性は外で働き女性は家において家事や子育てをするという文句であった。

こうした活動領域の性に基づく区分は、アチェのアダット（慣習法）やイスラム教の教えによっても支持されている。但し、これに関して、アダットとイスラム教は異なった働きをする。

アチェでは地域によってアダット（慣習法）も言葉も文化も異なるということがしばしば言われる。そのため、ここでアダットとして挙げるのは、アチェ・ブサール県の村々のそれと断っておく。この地域のアダット、特に相続に関する慣習法では、女性が優先的に、その親の家と家が立地する土地を相続する。家族が娘を持つ限り、息子はその親の家と家が建っている土地を相続することはない。息子が相続できるのは、田畑や店、店の土地といった生産手段に分類されるものである。アチェでよく見られる妻方居住の形態がこうした相続の慣習に反映しているのであろう。こうしたアダットによる取り決めは、バンダ・アチェのような都市では実現するのは難しいが、スブン・アヨンでは、津波前も津波後もほとんどの家が女性による所有である。<sup>3)</sup>

一方、活動領域の性による区分を支えるアチェのイスラム教の教えは、男性を重要視し、その地位を女性よりも高いものと定める。イスラム教の教えは、単に性別活動領域区分を支えるだけでなく、その家族観には、責任や役割を含む。それによると、男性は家長であり、その妻を含む家族に経済的なものを含む責任があると言われる。未婚女性の場合、結婚前は父に、結婚後は夫にその責任が移される。女性は、その世帯の中に既婚の男性がいる限り家長にはなれないし、何を行うにも男性庇護者からの許可が必要である。許可を得ていない行為はハラムとしてイスラム教の中では禁止されたものと表現される。こうしたイスラム教的な家族観は、アチェ社会の成員の間に、男女を問わず深く浸透している。

#### 4. 両性の平等

インド洋津波後、男女平等概念がアチェ社会に流布し始め、この概念は、少なくともアチェ・ブサール県を含むバンダ・アチェ周辺では、一般に「ジェンダー」という英単語一語のみで表されてきた。こうした新概念の流入の背景には、フェミニスト組織がアチェの村や町に設置されていったことがあった。

バンダ・アチェでは、4、5年ほど前にバライ・イノン（Balai Inong/既婚女性協議場）が各郡に再設立され、男女同権の推進や女性の経済活動の支援を行い始めた。また、この組織は、男性の女性に対するドメスティック・バイオレンスの予防にも努めている。バライ・イノン自体、津波の七年前までアチェの各村にあり、そこで、女性たちは宗教的な会合を含む集まりの場を設定していた。しかし、こうした女性たちの場は、津波後にアチェ政府と復興局が UNIFEM と協力して再設立するまで失われたままであった（UNIFEM 2009）。

バンダ・アチェのこうした状況に対し、アチェ・ブサールでは、ソリダリタス・プルンプアンが2005年という早い時期に村々で活動を始めていた。この NGO は、女性の自立と男女同権の実現を主要目的として活動を展開し、女性による家内工業やその他の経済活動を支援した。ソリダリタス・プルンプアンによれば、村の男性たち、特に農業従事者たちは、家族を十分に支えるだけの収入がない。従って、村の経済復興推進のために、女性に対する資金援助をしたのであった。それと同時に、男女同権・平等観を普及しようと努めた。その究極の目的は、女性でも男性でも家長になることができるという選択の自由を実現することである。これに加えて、男性にコントロールされない経済力を持つことは、女性の「解放」につながるとする。

その一方で、イスラミックな教えとの対話は村人に任せられたままにされていた。これは、ソリダリタス・プルンプアンによれば、現地の夫と妻の間に溝を作るのを避けるためであった。一方で、ソリダリタス・プルンプアンは、イスラミックな NGO ではないものの、ジャカルタのウラマ（イスラム教教師）にこの件に関して相談をしている。では、村民たちは、イスラム教の教えとフェミニズム的な考え方にどう折り合いをつけようとしているのだろうか。

## 5. 理想的な主婦像と妻の優位性

フェミニスト NGO の活動に関わらず、イスラミックな家族観は自然なものとして、少なくないスブン・

アヨン村の人々に受け入れられている。それは、アチェ人たちがしばしば理想とする主婦像あるいは既婚女性像にも表れている。スブン・アヨン村の多くの人々にとって、既婚女性の理想は、利益を生み出す経済活動をせずに、家で家事や子育てをする女性像である。これに対し、少なくない女性たちが、このイメージに、夫の全収入を手中に納めることを付け加える。両方のイメージとも、女性が何をすべきかということについてのメッセージを与え、また、女性の活動を制限する可能性を持つ。

妻による夫の収入のコントロールという要素を含む女性のイメージには、妻の有利な立場も認められる。女性たちの中には、こうした有利な点を認め、さらに利益を追求しようという者もある。イブ・アティカ（仮名、43歳主婦）は、ソリダリタス・プルンプアンから資金を借りている会員の一人である。しかし、彼女は、金銭的利益を生み出す経済活動を自分ではしていない。彼女は、借りた資金を、山から石を運ぶ仕事をしている夫に与え、これによりより多くの金銭的利益を得ようとしている。彼女がこうするのは、外で働いて収入を得るのは夫のやるべきことと考えるからである。これに対し、妻である自分は家において夫の収入を受け取ると言う。妻は、働く必要はなく、他者が稼いだ収入を得て使う存在であるのだ。家族に関するイスラム的な教えがこのように妻に専業主婦の地位を保証するのである。

妻が夫の収入をコントロールするのと対照的に、アチェにおけるイスラム教の教えは夫が妻の収入を自由にすることを許さない。これに従い、自身の収入を持つ妻たちは、妻の収入が夫にコントロールされるべきではないと主張する。妻の収入を持って行ってしまう夫は、非難的で、「悪人(orang jahat)」として表現される。これは、イスラム教の教えに、家族を支えるために働くのは、女性ではなく男性とあるためであろう。現実には、多くの妻たちが、自身の意思で働き、その収入をもって家族の食費を賄うなどしているが、彼女たちは、夫を持っている限り、また、自分の収入で家族を支える意思がない限り、イスラム教においては自身が家族を経済的に支える必要はないのである。アチェにおけるイスラム教の教えは、男性により高い地位をもたらすが、同じ教えが男性に女性の収入のコントロールを許さないのである。

## 6. イスラム教と両性の平等

津波以前、スブン・アヨン村では、少なくない女性たちが、より多くの収入を得ようとさまざまな経済活動を繰り広げていた。教師や公務員の職を持っている者もいたし、故郷から遠く離れて出稼ぎに行った若い女性たちもいた。また、畑作や、菓子作り、ランドリー・サービス、植物を使つての籠やその他の実用品製作、養鶏をする人々もいた。もちろん、夫より収入が多い女性もいた。

津波後しばらく経つと、多くの女性たちが再び経済活動に従事し始めた。それは、NGO が賃金を提供して村から瓦礫を取り除く作業から始まった。男性も女性も、老人も若者も、何もしていないよりは働いて収入を得たいと思った人々がいくつかのグループを作ってリーダーを決めて瓦礫を除く作業に没頭した。女性たちの稼いだ金は、彼女たちの意思で家計の足しにされた。当時は、食料や水、その他の物資が配給されていたため、基本的に必要な物は無料で手に入った時であったので、彼女たちは比較的自由に自身の収入の使い方を決められた。その後、多くの女性たちは、NGO から提供された資金を使い、村の中でできる仕事をするを選択した。教員や公務員、夫と共同で仕事を行う者を除いて、村外で雇用されての労働は、低賃金しか生まないと考えたこともこの選択をした一因である。オートバイを使用せねば、町で働いても、往復の交通費で毎月のサラリーが消えてしまうと多くの女性たちは言う。

女性たちが村内で行う典型的な経済活動は、養鶏、ココナッツ・パウダーや菓子作り、仕立てである。仕立ては、技術が必要であることから、スブン・アヨン村の女性たちの誰も行っていない。他方、人気があるのは、玉ねぎ入りスナック菓子作りであった。これは、小麦粉と玉ねぎなどを原材料にしたアチェの古くからあるスナック菓子で、生地を薄く伸ばして揚げる手間さえ厭わなければ、多くの利益を生むことができる仕事であった。こうしてさまざまな経済活動をする女性たちは、津波前と同様、夫よりも稼ぎが多い者もあったし、そうでない者もいた。

例えば、50代の主婦であるイブ・ラムラ（仮名）は、夫の数倍の収入を得ていた。彼女は、津波前行

っていたスナック菓子作りを津波後すぐに村に援助に来たドンペット・ドゥアファ・バンドゥンの援助で再開した。津波から3年経つ頃には、村の若い女性二名を雇って、空いた仮設住宅の一室を使用してスナック菓子を作るようになっていた。週に1, 2度、一人で公共交通機関であるミニバスに乗って、町の雑貨屋に出来上がったスナック菓子を売りに行った。当時の彼女の収入は、中堅の公務員の7倍ほどになっていた。イブ・ラムラは、その収入を彼女の子供たちのために貯蓄していた。

一見すると、イブ・ラムラは、起業して自身の意思で自由に行動しているように見える。しかし、彼女自身が言うのは、夫の許可がなければ、例え、莫大な利益を生むビジネスのためであろうと、村外には出られないということである。村の中の菓子作りでさえ、夫の許可が必要だと彼女は述べる。ただ、彼女によれば、夫は一度も彼女が行うことに反対したことがなかった。

夫からの許可とは一体何なのか。アチェのイスラム教徒たちは、これに関して、「許可(izin)」という言葉を使用するが、日常的には、多くの場合、夫が反対しないことが許可とみなされる。今日どこへ行くとか、何をするつもりだとかいったことを夫に話すだけのことが多い。こうした日常的な出来事が「許可」という言葉で表現されるとき、夫と妻の間、あるいは、男女の間の権力関係を含んだリアリティが創出される。

イブ・ラムラの場合、イスラム教の教えに沿って、自身が直面する現実を説明するが、これを無意識に潜めたまま、あるいは、これとの対話を試みないまま、フェミニズム的な思想に基づいて夫婦関係を表現する女性もいる。例えば、イブ・ジャイナブ（仮名）は、夫と妻は家族の中で等しい地位を持つと主張する。イブ・ジャイナブは、第二子を出産するまで働いていた経験を持つ30代の女性である。彼女によれば、夫は、妻にその収入を与えるが、妻は夫に自身が働いて得た収入を渡すべきではないとする。そこには、何故、夫が妻に収入を与えるのに、妻が夫に収入を与えてはならないかという説明はない。イスラム教の教えの中では、妻は夫に自身の収入を分け与える必要がないということになっており、それとは矛盾しない形、あるいは、それをそのまま受け入れたように見える形で、ソリダリタス・プルン

プアンも、女性が自分でコントロールできる金銭の存在の重要性を説く。イブ・ジャイナブはソリダリタス・プルンプアンにより説かれたことと同様の主張をするが、平等とはどういったことであるのかということは説明しない。

同様に、イブ・ラマラもイスラム教的な家族観に言及せずに平等のみを主張する。イブ・ラマラは、最近選任されたソリダリタス・プルンプアンの村組織のリーダーである。彼女は、村の書記長を父に持ち、母の村であるスブン・アヨンに復興住宅を得て住む30代の既婚女性である。キオスクを弟と経営する他、金銭を生む経済活動は行っていない。

イブ・ラマラは、次の様に述べる。

重要なのは、女性の自立です。女性が自分自身のためだけに金銭を稼ぐことは、女性の自立に繋がります。(中略) [イスラム教という]宗教では、男性は女性に責任を持ちます。[しかし]問題はありません。もし、男性が力を行使しても、女性が自立していたら問題はないのです。

そして、彼女は、男性が家族に責任を持つというのは名ばかりのものだと述べる。

イブ・ラマラの話では、女性の経済活動は男性のコントロールから女性を解放することに繋がる。イスラム教において、男性は女性に責任があるとされ、男性は、しばしば家庭において支配的な存在であるとされるが、彼女は、女性が自立していれば問題がないのだと言う。しかし、彼女は、何故、女性の自立が男性による支配と両立し得るのかを説明しない。

この様に、女性の自立の重要性を強調するが、イスラム教の教えとのすり合わせをしないままの女性たちもいれば、もう一方では、イスラム教の枠組みを離れることなく、女性の地位や夫の収入だけでは家計が賅えず自らも働かなければならないという現実を再考しはじめる人たちも出てきた。後者は、夫の義務や責任に関するイスラム教の教えを無視するのではなく、それが支える家族観に妻の責任や義務を付け加えるのである。

この新しい家族観は、スブン・アヨン村の中で広がりを見せている。例えば、村の女性問題委員であり高校教師の40代イブ・アジザ(仮名)は、こうした家族観を意識している。彼女は、イスラム教では、

夫が働いて収入を得、妻は家にいるのが最上であるが、もし、夫が家族を支えることができるほど稼ぐことができなかつたら、女性も働かねばならないと言う。さらに、家長として、夫は妻よりも高い地位にいたが、今は夫婦とも平等であると述べる。彼女によれば、現在の理想は、夫婦がともに助け合い、互いに責任を持ちあうことである。

同様に、53歳の主婦であるイブ・ジュリア〈仮名〉は、妻も夫に責任があると述べる。彼女は、ソリダリタス・プルンプアンに提供された資金を、夫と共にやっている農業に使用している。イブ・ジュリアは、妻と夫は互いに助け合わねばならず、生きていくためには、共に働くことが必要だと話す。彼女によれば、そうしてさえも、めったに、日々必要な糧を十分得ることはできないという。

イブ・ジュリアの現実の解釈は、新しくアチェ社会に入ってきた男女平等という概念に基づくが、彼女は、アチェ人イスラム教徒が持つ理想的家族像も認めている。彼女は、娘には早く結婚してもらいたいと述べる。彼女の娘は、教師になるために高等教育を受けたがっているが、イブ・ジュリアとその夫は、その教育費を支払うことができない。結婚を通して、娘に対する責任は、その夫に移ることから、この責任の移行が娘に高等教育を受けさせ得ると考えるのである。彼女は、自身が直面している現実を解釈する時、男女平等観を用いるが、自身や家族にとって有益であるならば、現地に広まるイスラム教教的な家族観も選択的に用いるのである。実際に、アチェでは、実の親がその費用を支払えないが高等教育を受けたい若い未婚の女性たちが、将来の夫にその希望を託している場合は少なくない。

一方で、53歳の寡婦であるイブ・ナスリア（仮名）には、男性の収入に依存することは考えられないことである。彼女は、30代の未婚の息子二人と住む。二人とも仕事を持ち、収入も十分にある。しかし、彼女は家長であり、二人の未婚の息子に責任を持つ立場であると言う。彼女は、実際に、常に働き、収入を得ようとしている。例えば、津波被災から間もないころ、NGOから提供された資金をもとに、ガソリンを売り利益を上げた。復興が進み、そこここでガソリンが売られるようになったとき、今度は、地味が戻ってきた土地を耕し作物を育てたり、養鶏を行うようになった。

こうして絶えず、収入を求めているイブ・ナスリアは、村の前に座り、絶えず金がないとこぼしている主婦たちを批判する。「働かないで、座っただけいて、なんでお金が入ってくるんだらうね。」皮肉を込めてこう言う彼女は、収入が十分でない夫を持つ女性が働くことは当然だと考えている。しかし、彼女の考えでは、働く領域が夫と妻では異なるのである。女性は家で、男性は外で働くものと主張する。こうして、イブ・ナスリアは、夫と同じ役割を妻に認め、妻の経済活動も支持するが、経済活動の領域を明確に区分しているのである。

## 7. 結語

イスラミ的な家族観とアダットは、アチェ社会に深く浸透している。イスラム教もアダットもスブン・アヨン村の女性たちに、しばしば優位性をもたらす。イスラム教のアチェにおける教えは、女性が男性の収入をコントロールすることに関して、何の問題も示さないが、男性に女性の収入を奪うことは許さない。これに加え、アダットも多くの女性たちに有利な立場を与える。相続に関する慣習法のため、村の家々のほとんどは、女性たちのものであるのだ。

女性の領域として、内として分類されている村の中では、女性たちが経済活動をし、また、優位性を誇る。ここでは、女性たちは頭を覆わなくともよいし、半袖も着ることができる。村の中では彼女たちはよそ者ではない。こうした意味で、村の中では、女性たちは、その夫より優位な立場にいることができるし、比較的的自由でもある。しかし、一方で、アチェにおけるイスラム教の教えは、決して両性の平等は説かないのである。ところが、津波被災後、援助を通して両性の平等という概念が入ってきたのである。

大災害で壊滅的な打撃を受けた被災地は、多くの場合、再建のため外部の援助に頼らねばならない。そうした人道的援助は、Domini(2008:34)によれば、「世界的な秩序」を持ち込むものもあり、西洋的な考え方や行動様式の方向性を強力に持っているものである。復興計画の青図面は、援助団体側の文化やイ

デオロギーに従ったものであるのも、もし、援助が成功するのであれば、多かれ少なかれ、被援助社会は、援助団体が所属する社会の文化の影響を受けるのである。北からの援助のみならず、南が南を援助する場合も同様で、人道主義の土俵に上がるためには、北の行動様式やロジックが必要なのである (Donini 2008:32)。

ソリダリタス・プルンプアンは、インドネシアのフェミニズム NGO ではあるが、活動資金の出所は国際的な援助機関を含む。例えば、スブン・アヨン村での活動資金は国際的 NGO である Oxfam からである。ドイツの NGO から資金を得ている。こうして欧米を中心に資金を獲得しているソリダリタス・プルンプアンのプログラムや論理、活動イデオロギーは、グローバルな、あるいは、西洋的な、ジェンダーに関する議論の枠組みの中に組み込まれたものであるといえる。そこに見られる思想は、西洋的なそれとそれほど変わらないのである。実際、ソリダリタス・プルンプアンは、イスラム教の教えとフェミニズム思想のすり合わせがないまま、スブン・アヨン村を含むアチェ・ブサル県村々において援助および教育プログラムを展開していた。ウラマとの対話はこのプログラムの中には取り入れられていなかったものであった。

一方で、アチェは、イスラム教がそのアイデンティティの一部になっている社会であり、他のインドネシアの地域とは違って、イスラム法が施行されている。イスラム法は、紛争のため、津波被災後にしか普及していないが、アチェにおけるイスラム法の浸透は、目に見える形で行われていった。女性の服装や外見の規制を通して可視化されたのである。普及以前は、女性たちは、ミニスカートを穿いたり、頭を覆わずに町の中を歩くことができた。しかし、現在は、頭を覆っていない女性の髪が切られた、ズボン穿いた女性が腰部を覆った服装をしなかったからという理由で太ももが切りつけられたという話が現地に流布している。こうした現地のイスラム法の解釈から逸脱した女性に対する暴力の話は、女性の外見を通して女性をコントロールするために働く。

しかし、津波被災以前も被災後も、イスラム教の教えと異なる現実がアチェにはあった。特に、被災

により生業を失った夫たちの中には、自身のみでその家族を支えるのが難しいと感じる人々も少なくなかった。もとより、アチェは、被災前はインドネシアの他の地域よりも失業率が高い地域であった。こうした現実の中、生活していくためには、あるいは、少しでも豊かになるために、妻たちの労働は欠かすことができないものであった。地域のイスラム教の教えの中では、夫は、家族を支える役割を負わされており、妻は、収入がある場合は、その収入を自身の意図で自由に使うことができた。しかし、貧困の中では、妻が自身の収入を自由に使うことは難しい。働きたくなくとも、働かねばならない状態もあった。

こうした状況の中で、イスラム教的な言説では説明仕切れない現実、一つの説明を与えることを可能にしたのが、新たに導入された男女平等観である。村の女性たちは、イスラム教の教えとのすりあわせを通して、フェミニズム的な価値観を自身の現実や将来の希望を説明するために用いた。そこでは、イスラム教同様、フェミニズムは、女性たちが置かれた現実における自身の経済活動あるいは不活動を説得力を持って説明した。イスラム的な家族観の中の夫の家族に対する責任に、妻のそれを加えることは、女性たちにとっては、イスラム教の教えと矛盾するものではない。こうしてイスラム教の教えと両性の平等という概念の対話により操作された家族観は、経済的に困難な現実の中にある女性の労働に対して、ひとつの見方を与えている。

しかし、一方で、イスラム教に基づく家族観は、人々の世界の見方に浸透しており、それが当たり前のものであり、アチェ社会に根を下している。特に男性たちの間では、ジェンダーという言葉も、その説明も聞き慣れないため、何のことか分からず、判断以前に理解することが必要であるという状況も村ではよくあった。フェミニズム的な価値観はアチェの農村社会には広まり始めたばかりであり、イスラム教の教えやアダットとの更なる対話の過程の中にあるのである。

#### 注

- 1) インド洋津波によりアチェで20%の雇用が失われた場合、被災前年(2003年)の失業率11.2%(インドネシア

全体では9.5%)が29%に上昇するという試算がインドネシア政府と国際的ドナーにより出された(cf. BAPPENAS n.d. 87-88)。

2) 古いタイプのアチェの木造家屋は、土台から津波により剥がされ流されていった。被災後、村中総出で流された家屋を元の場所に戻して再び住居として用いた。

3) スブン・アヨン村出身の男性は、しばしば村外で結婚し妻の家に同居する。男性が農業を行っている場合、妻の家族が所有する田畑で働くことも少なくない。こうした場合、アダットは、夫に不利に働くことがある。例えば、スブン・アヨン村の男性で、結婚して近隣の村にある妻の家に住んでいた者が、妻を怒らせてしまったために、自身の姉の家に戻ってきたという事例があった。農業従事者であるこの男性は、妻の家を去ると同時に、家も生産手段である農地も失ったのであった。

#### 参考文献

BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam

2005 *Donatur/NGO National-International: Yang Ikut Berpartisipasi dalam Kegiatan Rehabilitasi dan Rekonstruksi NAD*. Pasca Gempa Bumi dan Gelombang Tsunami 26 Desember 2004. BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.

BAPPENAS

n.d. *Indonesia: Preliminary Damage and Loss Assessment*.

BRR (Badan Rekonstruksi dan Rehabilitasi NAD-Nias)

2005 *Aceh and Nias One Year After Tsunami*. Banda Aceh: BRR.

Bowen, John R.

2003 *Islam, Law and Equality in Indonesia*. Cambridge University Press.

Domoni, Antonio

2008 "Through a Glass, Darkly: Humanitarianism and Empire." *Capitalizing on Catastrophe: Neoliberal Strategies in Disaster Reconstruction*. Nandini Gunewardena and Mark Schuller, eds. Pp.29-44. Plymouth: Altamira Press.

OCHA

n.d. <http://www.reliefweb.int/node/169972> 電子文書。アクセス2012年1月。

Olds, Kris, James D Sidaway, and Matthew Sparke

2005 "Guest Editorial: White Death." *Environment and Planning D: Society and Space* 23(4): 475-479. Electric document, <http://www.envplan.com/abstract.cgi?id=d2304ed>, accessed on October 30, 2008.

UNIFEM

2009 *Women Building their Future: Gender Breakthroughs in Post-Tsunami Aceh*. Electric document, [http://www.unifem\\_eseasia.org/docs/aceh/gender\\_breakthrough\\_final\\_3Dec.pdf](http://www.unifem_eseasia.org/docs/aceh/gender_breakthrough_final_3Dec.pdf), accessed on March 18, 2011.